

City & Life

都市のしくみと暮らし

143

Apr. 2025



[特集]

わたしのまちの独立系書店

加藤幸枝

色彩計画家、有限会社クリマ代表取締役



山の緑に映える赤い外壁色

10代の終わりに手にしたとある小説は、上下巻の色鮮やかな装丁が大変印象的で、私の北欧に対するイメージは長らく赤と緑がセットになっていました。三十数年の時を経て2023年の夏に鉄道駅でこの景色を眺めたとき、瞬時に脳内でビートルズの曲が再生され、小説の主人公が見たであろう風景が目の前に現れたような、とても不思議な感覚を味わいました。

現在の日本において建築外装の鮮やかな色彩は、景観の阻害要因になりうるものとされ、規制や制限の対象になることが少なくありません。実際1990年代後半から2000年代初頭にかけては突如住宅地などに出現した高彩度の外装色が「騒色」として問題視され、「良好な景観」の保全や育成に向けての法整備が進められるきっかけにもなりました。

ノルウェーやフィンランドの建築に多く見られる赤色は、古くは赤土の色素からつくられた塗料で、外壁の木材を保護するためのものだったそうです。その土地に長く根付いていた色には何がしか要因があり、気候・風土に適したものであることが伺えます。

山の緑を背景に佇む赤い外壁色を目にしたとき、改めて色は単体の良し悪しで評価を決めるべきではなく、環境(地形、気候、植生、生活……)全体の関係性で測ることが重要なのだと強く感じました。

City & Life

都市のしくみと暮らし

143

Apr. 2025

Contents

[連載] 第3回

都市・まちの色

ノルウェー・ミュルダール駅

山の緑に映える赤い外壁色

加藤幸枝

[特集]

わたしのまちの独立系書店

[インタビュー]

いま、書店が増えている?!

……全国に増える個性的な「独立系書店」

柴野京子

03

[ルポ]

まちと人をつなぐ「本屋さん」

……西荻窪の独立系書店を巡る

06

[ケーススタディ]

書店からはじまるコミュニティ

① かもめブックス

まちに愛される書店をつくる

14

② BOOK STAND 若葉台

団地のなかの新しい書店のかたち

18

③ ブックスキューブリック

「福岡を本の街に」する、町の本屋さん

22

[連載] 第3回

なぜいい町、好きな町

真壁町 木下庸子

26

[連載] 第9回

都市の緑3表彰 緑がつなぐ町・人暮らし

那覇市本庁舎

28

back number

32

表紙 BREWBOOKS
(関連記事: p06)
裏表紙 BOOK STAND 若葉台
(関連記事: p18)
photo: 坂本政十賜



「本」を活かしたまちづくりが増えている。なかでも、店主の個性や選書による店づくりでファンを獲得、カフェやギャラリーの併設、イベントの開催などで人が集まる場をつくる「独立系書店」が、町の魅力的な拠点として注目されている。私の町にある特定の書店のファンになる、その店を支えるために本を買うなど、顧客からの書店やオーナーへの信頼、書店からの顧客へのサービスが良い形で循環しているようだ。ただ一方で、1990年代後半からの出版不況、さらにオンライン書店の発達を受け、全国的に書店の数が減っているという現実もある。「町の本屋さん」がなくなること、あるいは新たにできることは、町にどのようなインパクトを与えるのだろうか。有識者のインタビューと共に、個性的な独立系書店を取材、書店とまちづくりの関係を探る。



photo: 坂本政十賜

インタビュー

柴野京子

上智大学文学部新聞学科教授



いま、書店が増えている?!

……全国に増える個性的な「独立系書店」

書店の数は減少している。2025年2月にも東京・自由が丘駅前の不二屋書店、大阪・東梅田駅前の清風堂書店という、老舗書店の相次ぐ閉店が新聞紙上で伝えられた。一般財団法人日本出版インフラセンターによれば、2023年度の全国の書店総数は1万918店で、10年前の2013年度の総数1万5602店から3割以上減少している。その要因の一つに雑誌の売上不振がある。とくに小規模な書店ではいつ売れるのかわからない書籍よりも、定期的に流通する雑誌により収益を得ることで店舗を維持してきた面が大きいからだ。ところが一方で、「独立系書店」と呼ばれる個人経営の書店の数は年々増加傾向にあるという。もっとも、独立系書店の定義はあいまいだが、株式会社トーハンの調査によれば、2024年10月時点で全国に341店が存在し、今後も増加が見込まれている。閉店する町の小規模書店と開店する独立系書店、その違いはどこにあるのだろうか。出版流通に詳しい有識者にお話をうかがう。

町の本屋さん 「いわゆる」独立系書店の違い

「独立系書店」という言葉は、もともとはアメリカの「Independent Bookstore」からきています。基本的には、チェーン店ではない、個人事業主が経営する書店のことですが、「いわゆる〈独立系書店〉」といわれているのは、従来の書店とは異なる個性的な品揃えの、小さくておしゃれな本屋さん、というイメージかと思います。

ですが、本来的には全国的に減少している町の本屋さんこそ、個人事業主が経営する「独立系書店」ともいえる。この違いを説明するには、本の流通スタイルがかかわってきます。

一般的な書店は、委託取引という方法で新刊書籍や雑誌を仕入れています。これらは各出版社が発行したものを、出版取次とよばれる問屋がとりまとめて全国の書店に配本するのですが、量が非常に多いため、書店の実績や特性に応じて適宜みつろって送ります。書店が注文したわけではないの

で、売れなければ返品できる。いわば「委託」されているということですね。もちろん必要に応じて書店が注文することも可能です。取次の方も返品のリスクがあるので、書店は一定の保証金を支払わなければなりません、日本では出版社の規模が小さく数が多いので、取次を通じて一通りの出版物を揃えるのが、合理的な一つのビジネスモデルだったわけです。

ですが、最近増えている新しい本屋さんの多くはそういうスタイルではなく、欲しい書籍だけをオーダーして取り寄せている。その意味では「セレクト書店」と呼ぶのがふさわしいかもしれません。もちろん、配本とセレクトの両方をうまく使っている書店もあります。

書店をめぐる二つの変化

セレクト書店が出てきた背景には、大きく二つの要因があります。一つはインターネット書店の出現です。これは単にヒューマンインターフェイスが求められている、というような話ではありません。従来、本を買う時には書店に行き、目的の本がなければ書店から取り寄せていましたが、今は自分でインターネットのデータベースから探して注文できるようになった。読者にとって、書店の役割が変わったということです。

もう一つ、これもインターネットの普及が関係していますが、書店の側も、本の仕入れや決済、情報収集などがICTを使って簡単にできるようになりました。小ロットでの流通業者が増えて、私たちがインターネット書店で本を買うのと同じような感覚で1冊、2冊と本を仕入れられるようになっていきます。たとえば、カフェや生花店の一角に少し本を売るスペースを設けたいといったニーズにも応えられるサービスが出てきた。以前のように総合取次と取引をする場合には、返品の手配として保証金を支払う必要がありましたが、そういうものも必要ない。書店を開業するハードルもかなり下がったのです。

つまり、本の流通を取り巻く環境と、消費者である私たち読者側の、書店に対する意識やニーズも変わっ

てきたのだと思います。欲しい本や必要な本はインターネット書店で買っても、セレクトショップのような店には目的の本を買うというだけではない「何か」を求めている。新しく出てきた書店の多くはカフェを併設したり、トークイベントを開催したりと、さまざまな形で本と人との接点をつくっています。そもそも、本は商品としての利益率が低く、しかも、セレクト書店の場合には扱う量も少ないので、本を売るだけでは食べていけない。そして読者側も、ただ本を買う場所としてだけの本屋さんを求めている。こうした変化があって、書店がサードプレイスの「居場所」としての役割をもつようになり、今回の特集テーマになっている「独立系書店」と「まちづくり」との関係が自ずと結ばれてきたのではないのでしょうか。

書店開業を志す動機とは

書店を開業したいという意向をもつ人も、確かに増えています。私が理事長を務めている特定非営利活動法人 本の学校でも、2023年に一般の方向けに「書店開業入門講座」をしたところ、オンラインも含めて約420名の参加がありました。これには驚きました。こんなに多くの方が興味をもっているのかと。

先に言った通り、本という商品は利益率が低く、価格の2、3割程度です。儲けようと思っ始めるような商売ではありません。しかも現在は小規模な町の本屋さんだけでなく、大型の総合書店も経営難で減ってきています。それにもかかわらず、書店開業を目指す人がなぜこんなに多いのか。もちろんみなさん個別の理由があって、それは図りかねますが、私個人としては、やはり本を売ることには、他の商品と比べると別の魅力があるのだらうと考えています。一つには、本のなかには常に「他者」がいる。執筆した著者がいて、作品のなかにもさまざまな登場人物がいる。直接会話を交わさなくてもいろいろな人に出会えるのが本であり、それがたくさん並んでいるのが本屋さん。そういうことが、他の仕事では味わえない魅力であり、訪れる人にとっ

ても独特な居心地の良さが感じられる場所になっているのではないのでしょうか。また、そうした居心地の良い場所としての書店が先事例として増えてきたことで、自分もそんな店をやってみたいというニーズの裾野が広がっているのかもしれない。

加えて、本の学校で行った講座もそうですが、下北沢のB&Bなどで知られる内沼晋太郎さんは、書店開業のための情報発信やレクチャーを行ったりしていますし、福岡のブックスキューブリックの大井実さん、荻窪でTitleを開業した辻山良雄さんなど、ご自分の経験を本にする方も多くて、ノウハウを学ぶ機会が増えている。このことも書店開業を志す人が増えている理由の一つでしょう。

ただし独立系書店だからまちづくりや地域の活性化につながるかという点、一概には言えません。当然、書店開業を目指す方が皆さん「まちづくりマインド」をもっているとは限らないし、むしろ一人で黙々と本を読むのが好き、という人の方が多いかもかもしれません。もっとも、ブックスキューブリックの大井さんはご自身で町ぐるみのブックイベント「ブックオカ」を主宰するなど、まちづくりを意識した活動を展開されていますし、とくに地方で書店を開業する方は、不特定の来街者のために商売をするというより、本屋さんを町の人々にとっての一つの拠点として捉えながら、地域の文化活動と連携している方が実際に多い。それは昔ながらの町の本屋さんと同じですし、書店に限らず、ある地域で個人店を開業しようとするならば、やはりその地域のことを考えて、必要に応じて連携せざるを得ない。それが結果的に町や地域の魅力向上にもつながっているのだと思います。

本を取り巻く環境の健全な姿として

一方で、書店が減り続けていることに関しては、経済産業省でも「街中にある〈書店〉は、多様なコンテンツに触れることができる場であり、創造性が育まれる文化創造基盤として重要である」として、2024年に

しばの・きょうこ

上智大学文学部新聞学科教授。早稲田大学卒業後、出版取次会社に勤務。東京大学大学院学際情報学府博士課程満期退学（社会情報学修士）。特定非営利活動法人本の学校理事長、日本出版学会理事、デジタルアーカイブ学会理事、一般社団法人出版者著作権管理機構理事、特定非営利活動法人ブックスタート理事、国立国会図書館納本制度審議会委員。著書に『書物の環境論』（弘文堂、2012）、『書棚とプラットフォーム—出版流通というメディア』（弘文堂、2009）他。

「書店復興プロジェクトチーム」を立ち上げ、関係者から広くヒアリングを行い、対策を考え始めています。すでに従来型の新刊書店のビジネスモデルは終焉を迎え、これを取り巻くシステムそのものを見直す時期にきています。そのなかでは、そもそも書店が受け取る利益率を上げるための値付けをしていくことも必要でしょうし、配本・返品にかかる流通コストの削減なども考えていかなければならないでしょう。また出版取次会社も大手2社（トーハン、日販）などと一括りにされますが、トーハンが小規模取次サービスとして「HONYAL」を始めていたりしますし、今後はそれぞれの方向性も変わっていくはずで

す。やはり一番の肝は、我々にとっての書店の位置付けが変わってきたということですね。かつての書店は情報センター的な機能を担っていて、たとえば、金魚を飼ったらその飼育本を本屋さんに買いに行く、という流れがありました。とくに日本の場合には近代的な図書館ができたのが遅かったので、なんでも満遍なく揃っているような総合書店が必要とされてきましたが、今やそういう情報収集はインターネットが叶えてくれる。もともと書店がもっていた意味を失っていくなかで、どういう本屋さんが必要なのかを、みんなが考えたり、つくったり、行ったりしているところに、今、いるのかな、と思います。

ですから、インターネット書店を目の敵にして、リアルかバーチャルかという二項対立をおおる必要はないのです。リアル書店といっても、大型化したターミナルでは、端末で検索したりしているのでしょうか。そういうことを考えれば、ある意味、インターネット書店があることで成立できる小さな書店の存在は、本のある環境を町のなかにつくっていくという点でも、意義があると思います。従来の書店のビジネスモデルがさまざまな理由で変わってきた時に、新しいスタイルの書店をやると思う人が出てきて、それがお客さんや町に求められるかたちで続いていくということは、すごく健全なことなんじゃないかと感じています。（談）



商店街が元気に営業しており、通りには個人商店も多い西荻窪の町並み

[ルポ]

まちと人をつなぐ「本屋さん」

……西荻窪の独立系書店を巡る

取材・文: 村田保子 photo: 坂本政十賜

店主のこだわりの選書やカフェスペースの併設などを特徴とする独立系書店が各地で増えている。個性豊かな独立系書店が町にあることは、町の豊かさや魅力につながると注目されつつある。最近では、地域活性化の視点からも、独立系書店にサードプレイスや地域の居場所としての期待が寄せられている。しかし、実際に店を営む書店は必ずしもまちづくりの当事者であることを意識するわけではなく、書店側が町や地域とのかかわりについて語ったものは少ない。そのなかで、西荻窪の「今野書店」と荻窪の「Title」へのインタビュー調査を実施した論文に出会った。この論文を手がかりに、独立系書店が多いといえる西荻窪の町にエリアを絞り、4軒の書店を巡って、店主の声に耳を傾け、町と書店の関係性について改めて考えてみた。

町の書店が町にもたらすものとは？

地域活性化の取り組みのなかで、本をきっかけに地域住民のつながりを生み出し、コミュニティを育む動きが注目されている。書店を活かしたまちづくりに取り組む自治体も増えている。青森県八戸市が公共施設として書店をつくり、民間書店では扱えないような専門書などを販売する「八戸ブックセンター」はその先駆的存在だ。町における書店の意義について、サードプレイスや地域の居場所としての価値への期待などが示されることが多いが、書店側が地域とのかかわりを意識する場面は限られ、書店側が町や地域とのかかわりについて語ったものは少ない。そのなかで、三鷹市職員で、

以前は三鷹市立図書館に勤務していたという堀江富美さんが執筆した、「〈まちの本屋〉がまちづくりにもたらすもの」という論文に出会った。堀江さんの論文は、三鷹市とNPO法人三鷹ネットワーク大学推進機構*1が共同設置している「三鷹まちづくり総合研究所」が実施している「まちづくり研究員」事業で、堀江さんが市職員としてではなく、一研究員としてこの事業に参加して、調査研究・執筆したものである。事例研究として西荻窪の「今野書店」と、荻窪の「Title」へのインタビュー調査を実施し、書店を営む側から町との関係性を語った生の声が盛り込まれていたことに新鮮さを感じた。まちづくりにおける町の独立系書店の意義を、研究テーマに選んだ経緯を堀江さんに聞いてみた。

「書店のもつ公共性や間口の広さに可能性を感じました。時間はかかるかもしれませんが、書店の選書や棚づくりが町で暮らす人に影響を与え、相互作用によって書店にも地域性が育まれるのではないかと思います。そういった場所が町にあることはとても豊かなのではないのでしょうか」

老舗の駅前書店である「今野書店」と2016年に開業した「Title」は、タイプの異なる書店だが、堀江さんは町に対する視点や考え方に共通点を感じたとも話す。

「どちらの書店も独りよがりにならないように、町の人たちが求める本を幅広く選書することを大切にしており、書店は広く開かれた場所であるべきという考え方が印象的でした。また子どもが一人でふらりと来て本と出会うことで、子どもの内面を育てることにつながるという意識ももたれていることも共通しています。地域への使命感や責任感を強くもたれて書店を営んでいるのだと感じました」

堀江さんは、書店と同じく多くの本を扱う図書館と比較して、書店には自由度の高さがあると感じているとも話す。



元三鷹市立図書館員、現在は同市企画経営課職員の堀江富美さん。「三鷹まちづくり総合研究所」の「まちづくり研究員」として、町と書店にかかわる研究経験をもつ

「公立の図書館は選書基準などに沿って蔵書を揃えています。書店はそのお店の考え方でどんな方向性でも選書やイベントを打ち出すことができます。本はどんなものでもつながれる可能性があり、公共性を持ちながら個性を出すことができるという点で、地域の魅力をつくることにつながると感じています」

そう話す堀江さんは、三鷹に隣接するエリアとして荻窪の「Title」と西荻窪の「今野書店」を事例研究の対象にしたという。これを参考に荻窪や西荻窪のエリアを調べてみると、独自のカルチャーがあるといわれる中央線沿線でも、とくに西荻窪に独立系書店が多いことがわかった。書店の多い町で、書店巡りをすれば、そこから浮かび上がってくる町の魅力を知ることができるだろうか。堀江さんの研究を参考に、西荻窪にエリアを絞って町と書店の関係性を見ていくことにした。

独立系書店の多い西荻窪の特徴

中央線沿線のエリアのなかでも西荻窪が異彩を放っているのは、駅周辺の大規模な再開発が行われておらず、昔のままの細い路地が残されていることにある。その理由は、住みたい町に選ばれる吉祥寺と、杉並区の交通結節点として再開発された荻窪に挟まれ、土日は各駅停車しか停まらず、大手資本が入りづらいことが考えられる。その結果、独自の世界観をつくり上げた個人商店が多いことが町の大きな特徴になっている。

路地に密集する魅力的なカフェ、居酒屋、バルなどの多彩なジャンルの飲食店、雑貨店やアンティークショップが多いことでも知られている。洒落たスイーツや焼き菓子の名店も増えていて、町歩きが楽しめるエリアとして、休日には町の外から人がやってくる。最近ではSNS映えする写真が撮れると話題のレトロな喫茶

店をめぐって、局所的に若者が集まっているという話も聞いた。

さまざまな業種の個人商店が多い西荻窪は、古書店が多いことでも有名であり、独立系書店も他の町と比較して数が多い。理由は作家、詩人、歌人、編集者など、出版関係者が多く住む町であるからという説が濃厚ではあるが、この町で書店を営んでいる人たちは、町との関係をどのように感じているのだろうか。また、さまざま個性をもつ独立系書店は、西荻窪の町にどのような影響をもたらしているのだろうか。西荻窪の町と独立系書店を巡って店主に話を聞きながら、町と書店の関係性を掘り下げていく。

西荻窪で唯一の総合新刊書店

堀江さんのインタビュー調査にも登場した「今野書店」は、西荻窪を代表する昔ながらの町の書店として外せない存在だ。1968年に上野で開業し、1973年に西荻窪に移転。2011年に現在の北口駅前に移転してリニューアルオープンした。書店が多いとされている西荻窪でも、従来型の総合新刊書店は次々と閉店し、「今野書店」は西荻窪で唯一の総合新刊書店となっている。

「西荻窪は小さな商圈に素朴な文化が密集して栄えている町だと思います。この町に住んで52年になりま

すが、商店街も元気に営業していて、店の移り変わりはありますが根幹は昔から変わらないですね」

そう話すのは「今野書店」代表取締役の今野英治さん。父から受け継ぎ2代目の社長となって29年になる。取次からの配本に加え、長年の経験にもとづいて、子どもから高齢者まで地域の人々が満足できるような総合的な品揃えを心がけている。

「西荻窪には作家や出版関係者が多く住んでいることもあり、人文系の本や専門書などがよく動きます。本好きが集まってきたから、そういう本屋になったのか、本屋の選書によって、本好きが住むようになったのかはわかりません。中央線沿線は文化人が集まっていた地域で、うち以外にも本好きの琴線に触れるような本を置く本屋が多かったから、そういう客層になった可能性はありますね。本好きの方が本屋のファンになると、繰り返し通って大量に本を買ってくれます。うちは都会だから成立しているといわれるけど、そんなことはなくて、本好きの人はどこの地域でもいるから、買ってくれる人がいることを信じて品揃えをすることはすごく大事なのです」と今野さん。

朝10時の開店と同時にたくさんのお客さんが訪れ、店内は一気に動き出す。平日も賑わいがあり、夕方頃にはさらに活気にあふれる。毎日のように通ってくるお客さんもいて、レジで交わすスタッフとの何気ない会話を楽しみにしている人も多いようだ。

地下をイベントスペースにして、絵本の読み聞かせや著者のトークショーなどを頻繁に開催し、遠方からも人が訪れ、好評を博していたが、賃料の高騰により地下は撤退して、今後は店内や他の会場で開催していく予定だという。誰もが楽しめる駅前の総合書店として「今野書店」は多くの住民たちの拠り所となっている。その光景は、西荻窪が本好きな人たちが住む町であり、書店を文化的な居場所として楽しむことを日常として暮らしている人たちがいることを伝えている。

今野書店



「今野書店」代表取締役の今野英治さん



店内では幅広い年齢層の方が熱心に本を探していた



開店と同時にお客さんが訪れ、一日を通してたくさんの人で賑わう



西荻窪や中央線エリアに関連する本や雑誌は人気が高い

児童書の品揃えにも力を入れている



「BREWBOOKS」は元ギャラリー兼住居の2階建ての戸建てを改装。レンガ張りの外壁は海外の書店のような佇まい

「BREWBOOKS」店主の尾崎大輔さん



2階は畳敷きの和室。イベントスペースや貸し切り利用、時間制で読書や仕事に使える書齋として運営

1階の書店スペース。新刊書籍が中心だが、古書も3割ほど並ぶ



2階の一角には『西荻さんぼ』の著者であるイラストレーター・絵本作家の目黒雅也氏のイラストや蔵書を常設展示。目黒氏のアトリエもあり、たまに訪れて仕事をしているという



棚貸本屋「BOOKSELLER CLUB」も運営。35~40人の店主が本を販売



クラフトビールを提供していることも特徴。2階の書齋はイベント時を除き、クラフトビール1杯付きで1時間1000円から利用可能

BREWBOOKS

町や人とのかかわりからつくる書店

西荻窪が好きで、この町で暮らし始めた人は、ますます町が好きになり、離れがたくなるという。「BREWBOOKS」の店主、尾崎大輔さんもその一人。西荻窪に長年暮らし、大好きな西荻窪とかかわりながら何かをしたいと考えて書店という業種を選んだ。店名には「麦酒と書齋のある本屋」というキャッチフレーズがついている。駅の南口から徒歩4分の場所に、元ギャラリー兼住居だった築50年ほどの2階建ての物件を借りて、1階を書店に、2階は畳敷きのイベントスペースに改装。2階は貸し切り利用も受け付けており、イベントがない日は時間制で読書や仕事に使える書齋として運営している。久我山にある「マウンテンリバーブリュワリー」のクラフトビールを提供していることも特徴で、ビールを飲みながら本を選ぶこともできる。

尾崎さんは書店勤務の経験はなく、独学で書店経営をスタートさせた。2018年10月に「BREWBOOKS」をオープンすると、西荻窪在住の作家や歌人、イラストレーター、編集者などが続々と店を訪れ、そこで生まれた交流を選書に活かし、関連イベントを定期的で開催するようになったという。短歌のイベントに力を入れ

ており、「ニシオギ短歌部」「ニシオギ歌集読書会」はそれぞれ毎月開催している。

「店を始めるまで、西荻窪に歌人が多く住んでいることも知りませんでした。すべてのご縁は店を始めてできたもの。西荻窪に住む出版関係者にとって新しい書店ができることは大ニュースで、たくさんの方が来店して、話かけてくれたことで店ができていきました。西荻窪は個人が何かをやることを受け入れてくれる町。常連のお客さんには、Amazonなら翌日に届くの、日数がかかってもいいからとわざわざ注文に来てくれる方もたくさんいて、応援の気持ちを強く感じています」

そう話す尾崎さんは、常連の方はそれぞれの捉え方で、「BREWBOOKS」を居場所と感じてくれているのではないかと考えている。1階の奥は棚貸本屋「BOOKSELLER CLUB」として運営していることもあり、35~40人の棚の店主たちと常につながっている連帯感もある。

「小さな坪数に対して関係人口は多いと思います。自分だけで完結せずに、町や人とのかかわりのなかで店をつくっていったらと考えていました。店がよくなっていきかけは、続けていけば何かしら起こります。町や人の影響を受けて、自分では予想していなかった方向に店が変化していくほうが、経営する側も面白いと



ご主人の原田福夫さんとともに「信愛書店en=gawa」を営む直子さん

書店コーナーは入口付近にあり、直子さんが選書した戦争関連の本などが多く並ぶ



本にフィルムコートを装備する「Libretto」の作業所も併設



直子さんが熱中しているのは、古い切手や地図、チケット、ポストカード、雑誌スクラップなどを詰め合わせた紙雑貨の販売。流行しているコラージュの素材として人気

「信愛書店」では中央線沿線の本の配達を幅広く担っている

西荻窪をテーマにしたてぬぐいなどオリジナルグッズも並ぶ



信愛書店en=gawa

感じています」と尾崎さん。気を使わずに自由に本を選んで欲しいという気持ちから、普段は店の奥にあるレジカウンターに隠れていて、自分から話しかけることはなく、声をかけられたら会話を始める。開業して6年半、この場所で交わされたいくつもの会話からつくられた書店は、西荻窪の町にとってもよく馴染んでいる。

未来の書店の一つのかたち

西荻窪駅南口の神明通りにある「信愛書店en=gawa」は、1934年に早稲田で創業した老舗。戦後1947年に西荻窪に移転して、店主の原田福夫さん、直子さん夫妻が長年にわたって総合新刊書店として営んできた。2014年に書店スペースを大幅に縮小し、ギャラリーとコミュニティスペースを併設するセレクトショップとしてリニューアル。町の人たちが気軽に立ち寄れる縁側のような場所にすることを考えていたという。現在は、スタッフが自主運営する「Libretto」の作業所にもなっており、図書館などで扱う本にフィルムコートを装備する仕事を請け負っている。また、海外から仕入れたポストカード、古い切手や地図、チケット、雑誌スクラップなどを詰め合わせた紙雑貨を扱うコーナーもある。

直子さんは、同じ本を大量に販売することを求められる新刊書店の経営に興味をもてず、古書店の勉強会や

イベントに参加したり、神明通りの商店街である西荻東銀座会の活動などに積極的に取り組んできた。まちづくりを担ってきた書店経営者として、西荻窪と書店の関係性について聞いてみると、「西荻窪だからとか、書店だからとって特別なことはありません。どこの地域でも、どんな業種でも町とのかかわり方は変わらないと思います」と話す。出版関係者が多く住んでいることについても、「終電が遅くまであるからでは？ 西荻窪が本の町だと意識したことはありません」という見解だった。

現在は店舗の入口付近の4分の1程度のスペースが書店となっていて、雑誌や新刊本、古書なども置かれている。書店機能を残している一番の理由は、昔からの地域の常連に研究者や教育関係者などが多く、入手するのが難しい専門書の注文を受けるからだ。どんなに手間がかかっても、受けた注文には応えることが直子さんの信念。常連の客層と求められる専門書には、文化的な町とされる西荻窪らしさが感じられる。

原田さん夫妻は、「信愛書店」以外にも、音楽やサブカルチャー系の本を独自に仕入れ、著名人のサイン会やトークショーなどを開催してきた「高円寺文庫センター」を2010年まで、29年間にわたり経営していた。町にあった選書やイベントを時代に先駆けて取り入れ、多くのコアなファンがいた。最後の数年はブックカフェ「茶房 高円寺書林」として営業。「書店に何が求められ

ているかを知りたくていろいろやりましたが、新刊書店だけでは限界があると感じました」と直子さんは話す。「〈Libretto〉は労働協同組合（ワーカーズコープ^{※2}）の理念に基づき、集まったメンバーが共同出資して自主運営しています。信愛書店とは別の組織で、将来的には後進に引き継ぐ予定。フィルムコートの装備はスキルが求められる手仕事で、できる人が減っていて需要が多い。本のある場所を大切にしたい、本好きの人が本にかかわる場所を育てていきたいという思いは変わりません。時代にあわせて求められることをやっていきたい」と直子さん。

コミュニティスペース、ワーカーズコープの拠点、紙雑貨のセレクトショップ、そして書店。独立系書店の先駆けとして走り抜けてきた原田さん夫妻が、迎っていた現在地は、何とでも組みあわせられる本の自由さを活かした、未来の書店の一つのかたちなのかもしれない。また、このような個性が突出した個人商店が、町に溶け込んで自然体で商いをしていることも、西荻窪の町の奥深さにつながっていると感じた。

広い間口と個性を出すことの葛藤

「今野書店」の前を通り過ぎ、しばらく歩いたところに「旅の本屋のまど」はある。ここは日本初のブックカフェとされている「ハートランド」という古書店があった場所。書店として後を引き継ぐ人を探していると聞いて、手を上げたのが「旅の本屋のまど」店主の川田正和さんだ。世界中を旅して、ニューヨークやロンドンなどで見かけた旅専門の書店をやりたいと思うようになり、リプロの契約社員に。その後、旅行会社の一角にあった「旅の本屋のまど」の店長を務めた。2007年に書店部門が閉店することになり、川田さんは自身が入っていた店名を譲り受けて独立し、西荻窪でこの店をオープンした。

「物件は中央線沿線で探していました。本が好きで書店に足を運ぶ人がかろうじて残っていると感じていたから。西荻窪に思い入れがあったわけではなく、たまたま見つけた出会いでした。店を始めた18年前は今よりもっと個人商店が多く、癖とこだわりは強いけど、どの店もすごくレベルが高かった。世の中の流れとは関係なく、それぞれが好きなのをやっている面白い町だなと思いました」

そう話す川田さんが、店を始めて驚いたのは客層の

8割が女性だったこと。近くに東京女子大学があり、コロナ禍前は西荻窪でアンティークショップ巡りを楽しむ女性が多かったからだと考えられる。顧客の中心は40以上の女性たちで、旅に関連する海外の料理、暮らし、雑貨など、女性が好む選書に力を入れ、それらの本がよく動いた。コロナ禍以降も変わらず、女性客が多数を占めるが、中心の年齢層は20代～30代に変化したそうだ。

「海外へ行けない状況でも旅に好奇心をもっているのは、若い女性が多いように感じます。インターネットやSNSでは知り得ない情報を求めて、旅の本を探しにきてくれる。若い人たちはリアルを体験したいから書店に来るのではないのでしょうか」

旅の本屋のまど



「旅の本屋のまど」店主の川田正和さん



駅から伏見通りを5分ほど歩いた静かな場所にある



平台が多く、本や雑誌の表紙をじっくりと眺められる



ZINEや自費出版の本も数多く扱い、人気が高いという



地域ごとに分けられた棚には、旅行記、エッセイ、料理、雑貨、文化など、旅にまつわる本が混在

新刊と古書を区別せず、ジャンルや作家で分けられている

旅にまつわる雑貨は、作家からの持ち込みが多いという



川田さんのモチベーションは、旅に行く人を増やしたいという思い。「ここで本を見つけて、それがきっかけで旅をしてきました」と言われることが一番嬉しいと話す。コロナ禍以降は、お客さんとの会話は減ったが、元バックパッカーが旅の話をしたくて訪れたり、旅の相談をもちかけられたりすることも多い。

「海外に行ったことがない人や興味をもっていない人に、きっかけを与えたいという気持ちも強いです。旅慣れた人だけが集まるマニアックな場所ではなく、間口は広く開けて、いろいろな人を受け入れる書店でありたいと思いつつ、個性を出していかないと外から人を呼べないので、そこに葛藤はありますね」

月1回のペースで開催している著者のトークイベントが盛況で、地域の外から足を運ぶ人が多く、イベントをきっかけに「旅の本屋のまど」のファンになる人もいる。他の書店と同様に、イベントは広い間口と個性の表現を両立する大切な要素になっているようだ。

外から人が集まってくる西荻窪に路面店を構えていても、ふらりと入ってくる人が本を買うことは少なく、地域の常連客や情報を目指して足を運ぶ人が店の売上を支えている。長く西荻窪の町を見つめてきた川田さんは、「町の賑わいは特定のスポットや店に集中しがちで、ピンポイントになってきている気がします」と話す。一つの場所を目的に町に訪れ、それを達成したら帰路につく。18年前はアンティークショップ巡りをしていた人たちがストリートからも消えた。点から線へ、線から面へと広がっていくとされる町の賑わいは、再び点に戻りつつあるのかもしれない。

ニッチが積層する西荻窪の魅力

町と書店の関係性や、書店が町にどのような影響を与えているかを考えるために、西荻窪の4軒の書店を巡ってみて、それぞれが異なる方向性で書店を営み、訪れる人や地域から求められること、果たすべき

魅力的な個人商店が並ぶ西荻窪の路地はニッチが積層している



古書店が多いことも西荻窪の町の大きな魅力

役割に真摯に向きあっていることがわかった。

西荻窪には他にも、ギャラリー併設の「URESICA」、ほびっと村3階にある「ナワ・プラサード書店」、古民家を改装したブックカフェ&ギャラリー「松庵文庫」、西荻窪と荻窪の間には堀江さんの論文に登場した独立系書店の草分け「Title」もある。古書店は「古書 音羽館」「盛林堂書房」「にわとり文庫」「古本バル 月よみ堂」「古書 西荻モンガ堂」「中野書店 古本倶楽部」など、一日ではまわりきれない数の書店があり、それぞれに独自の選書や店の雰囲気を楽しむことができる。

アンティークショップや古書店の多さは、この町に独立系書店が多いことにも関連があるように感じた。大量生産・大量消費の対極にあるアンティークショップや古書店は、マニアックな一点ものを扱い、買い手を選ぶ性質が強い。万人受けはしないけれど、誰かにとってはかけがえのないものであり、住民も来街者も自分だけの掘り出しものや偶然の出会いを求めている。ものを買うだけではなく、その背景にあるストーリーに価値を見出し、それを誰から買うかというプロセスを大切に考える。そんな人たちが集まる町では、大規模書店が扱わないジャンルの本を揃えたり、店主独自の選書によってその個性を発揮する独立系書店は、歓迎されるはずである。アンティークショップや古書店、その他の個人商店が作り上げてきた、自分が選んだものに共鳴する誰かが来てくれるという期待感、個人が好きなことで小商いを続けていく土壌への信頼感につながり、独立系書店の出店のしやすさにつながっているのではないだろうか。

また西荻窪は、小規模な個人商店が、細く長く、好きなことを続けることを受け入れる文化が育まれており、風情のある老舗が多い。一方で新規オープンする店も後を絶たず、ほどよい新陳代謝があり、新旧の店が心地よいバランスで共存している。50年以上営業を続ける老舗書店と店主の個性が光る独立系書店が、競



合することなくそれぞれのやり方で書店という業態を営んでいることも印象に残った。

「旅の本屋のまど」の川田さんは「西荻窪の個人商店は横のつながりがありなく、互いに干渉せずにより距離感でやっている感じがします。町としての印象を強く押し出そうという雰囲気もない。高円寺や阿佐ヶ谷と比べても静かな町です。僕はそのニッチな感じがすごく心地いい」と西荻窪の魅力を教えてくれた。中央線エリアにポツンと残されたエリア自体のニッチな魅力もあるが、一軒一軒の店も再開発されたエリアのように均質な面として計画されたものではない。一人ひとりの店主が自分の好きなことやこだわりを、町の隙間に埋

め込むようにして作り上げたニッチな空間だ。今回紹介した独立系書店もまた、静かでニッチな居心地のよい場所として、西荻窪の町をつくる重要なピースになっていることを実感した。

※1 三鷹市と近隣の教育・研究機関を正会員とし、企業や団体等を賛助会員として、平成17年より活動を継続するNPO法人。「民学産公」の協働により、教育・学習機能、研究・開発機能、窓口・ネットワーク機能を広く地域に提供し、市民の生活・知識・経験・交流に資することを目的としている。

※2 働く人びとや市民がみんなで出資し、経営にみんなで参加し民主的に事業を運営し、責任を分かち合っ、人と地域に役立つ仕事を自分たちでつくる協同組合(出典:労働者協同組合 ワーカーズコープ・センター事業団 ホームページ)。



書店からはじまる コミュニティ

必要な本はネットを検索すれば大抵は手に入る現在、自分の町に本屋さんがあることが、どんな意味をもつのだろう。最近数を増やしている「独立系書店」の多くは、カフェやギャラリーなどを併設し、人々にとっての「サードプレイス」的な役割を担っているとも聞く。個性的な独立系書店を訪ね、町と本屋さんとの関係を探る。

取材・文: 村田保子 (P14~21) / 斎藤夕子 (P22~25) photo: 坂本政十 賜 (※特記のないもの)



通りに面してガラス張りとなったファサード。併設するカフェにはテラス席もあり、町とのつながりが感じられる



奥行きのある書店スペースは、通路が広くゆったりとした居心地



入口付近の棚には雑誌が並ぶ。表紙が見えるように陳列するのが「かもめボックス」のこだわり

1

かもめ ボックス

まちに愛される
書店をつくる

開業: 2014年

住所: 東京都新宿区矢来町123 第一矢来ビル1階

電話: 03-5228-5490

営業: 11:00 ~ 20:00 (水曜定休)

HP: <https://kamomebooks.jp>

ジャンル: オールジャンル

形態: 新刊書店 / カフェ / 雑貨



鷗来堂の代表取締役であり「かもめボックス」を運営する柳下恭平さん

町から書店がなくなるリアリティ

地下鉄東西線の神楽坂駅周辺は、奥神楽坂と呼ばれ、新潮社の倉庫をリノベーションした複合施設「AKOMEYA TOKYO in la kagu」などがあり、休日には散策を目的に訪れる人も多い。この町で「かもめボックス」は2014年に開業して10年になる。

通りに面したガラス張りの店内は、左側にカフェスペースがあり、気軽に足を踏み入れられる雰囲気だ。右側は奥行きのある空間で、十分な余白を設けながら本棚が並んでいる。中央に並ぶ本棚が4段分の高さで抑えられていることもあり、奥まで視線が抜けて圧迫感がなく、居心地のよさが感じられる。

入口付近には表紙が見えるように陳列された雑誌コーナー、3週間ごとに入れ替える特集棚、取次の配本の棚もある。大半の面積を占めるのは独自のテーマでカテゴライズされた選書の棚。たとえば「本のある風景」「本をつくる人・もの」「哲学はいたるところに」など、それぞれの棚に魅力的なタイトルが付けられ、仕事のアイデアや人生のヒントにつながる一冊に会いそうなワクワク感がある。また、棚のタイトルから刺激される期待が、一冊だけではなく同じ棚にある本をいくつも読んでみたいというモチベーションを生み出す。奥に書店のレジがあり、その前に本やコーヒーにまつわる雑貨を扱うコーナー、さらに奥に3面を囲むように棚が並んだコミックのコーナーもある。

オーナーは長年神楽坂で暮らし、書籍校閲を専門とする鷗来堂を営む柳下恭平さん。以前この場所には、飯田橋や四谷など都内に複数の店舗を展開していた「文鳥堂書店」があり、柳下さんも客として通っていた。

金曜日の仕事帰りに寄って、週末に読む本を購入するのがルーティンだったという。ところがいつも通り月曜日に出社すると「文鳥堂書店」のシャッターが閉じていて、突然の閉店を知ることになる。

「この場所が書店でなくなってしまうのは嫌だ。それなら自分がやってみようと思ったのが最初のきっかけです。書店の閉店が増えていることは知っていましたが、いざ自分の住む町から書店がなくなると、その事実が圧倒的なリアリティとなりました。自分たちは校閲者として本をつくることにかかわってマネタイズしてきたけど、本には取次と書店間でのマネタイズの仕組みがある。それを知識としては知っていても、実際に運用して商売していくことについてはまったく理解していませんでした。自分で本を売ってマネタイズする書店を営むことで、本づくりに携わっていくことにも説得力がもてると思います」と柳下さん。こうして元書店だった場所に「かもめボックス」がオープンすることになった。

町が店を育て、店が町を育てる

「かもめボックス」の選書は、柳下さんと共にオープニング時から店舗をつくり上げてきたスタッフたちが中心となって手掛けている。

「選書を担当しているスタッフが〈町が店を育て、店が町を育てる〉とよく言っています。その言葉通り、この10年間で扱う本も随分変わりました。自分たちが好きな本を置くのは簡単ですが、売上を考えればお客さんが求めている本や売れる本を置く必要がある。でも売上だけを考えていては、町は育っていかない。求められている本と自分たちが読んで欲しい本を混在させて、常にその割合を考えながら入れ替えていくことをやっていきたいと考えています。毎週買いに来てくれるお客さんのために〈週刊新潮〉や〈コロコロコミック〉などを置いたり、一人のお客さんの顔を思い浮かべながら、その方が好きそうな同じ系統の本を仕入れたり

3週間ごとに入れ替えられる特集棚。取材時のテーマは「アメリカ」



見どころ満載の選書の棚。本や言葉、校閲にかかわる本を集めたコーナーも充実



一番奥にあるコミックのコーナー





本や文具、コーヒーに関連する雑貨のコーナ。雑貨を入れ替えることで店内に季節感を取り入れている



入口を入ってすぐにカフェスペースがある



カフェで提供するコーヒーは、京都の自家焙煎珈琲豆専門店「WEEKENDERS COFFEE」の豆を使用。数種類の豆から選んでハンドドリップで淹れたコーヒーを味わうこともできる



「かもめブックス」のロゴや店内に散りばめられたサインなどにも遊び心が満載。10周年記念のオリジナルTシャツは本好きにはたまらないデザイン

ということも繰り返してきました」

もともとあった「文鳥堂書店」へのリスペクトをもちつつ、同じスタイルで書店を続けるのではなく、新しいスタイルで店をつかっていきたいという思いは強かった。週末は他の町から人が来るとはいえ、日常的には神楽坂駅周辺に住んでいる人や働いている人たちがターゲットとなる。その人たちが週に2〜3回は立ち寄って、20分程度滞在してもらえる書店にすることを目指して、店づくりを行ってきた。在庫数は多くなくても定期的に本が入れ替わり、本のタイトルを眺めることを楽しみながら奥へ奥へと誘われる動線も、そんなコンセプトから導かれている。広い通路はベビーカーを押しながら店内を見て回れると、ファミリーにも好評だ。

店頭のカフェスペースは「WEEKENDERS COFFEE All Right」として営業。京都の自家焙煎珈琲豆専門店「WEEKENDERS COFFEE」の豆を使用している。数種類の豆から好みのものを選んでハンドドリップで淹れたコーヒーを味わうこともできる。カフェとしての認知度も高く、毎日コーヒーを飲みに訪れる人も少なくない。

カフェスペースを併設することの最大のメリットは「書店に接客の要素をいれること」だと柳下さんは考えている。カフェのお客さんが本を買い、書店のお客さんがコーヒーを楽しむ相乗効果はもちろんあるが、カフェがあることで店に入ってきた人に「いらっしゃいませ」「こんにちは」など自然に声をかけることができ、コミュニケーションが生まれる可能性が大きくなる。また書店のレジが奥にあるため、そちらのスタッフにお客さんが店に入ってきたことを伝える機能にもなるという。

「手前のカフェから奥に進んでもらえるように、光や香りも工夫しています。手前は温かみのあるオレンジ色、奥は少し緊張感のある白色のスポットライトを設

置。奥に換気扇を設けているので、グラインダーで挽いた豆の香りが奥まで届くようになっています。店舗内のどこにいても、居心地よく過ごしてもらえるようにと考えながら空間をつくってきました」

本だけがあらゆる思想を表現できる

柳下さんは「かもめブックス」をオープンしてから、神楽坂の町とのつながりを強く感じるようになったと話す。オープン前にSNSのアカウントをつくったところ、1週間ほどでフォロワーが約2000人になり、現在では1.6万人になっているが、インターネットの数字はリアルではないことを痛感しているという。

「オープン前、まだ工事も進んでいない時に、何の告知もせず、コーヒー豆を挽いたりすることを試しながら、内覧会のような雰囲気ですべてを開けて過ごしてみました。そして通りを歩く人を見たり、入ってきてくれた人と話をしたりすることで、町の解像度がすごい速度で上がっていくことを感じたのです。オープンしてみたら、釣り銭が足りない時に近所の飲食店の方が助けてくれたり、食事に行った先で声をかけられたりすることが増え、地域の商店街や婦人会とのつながりもできました。2000人のフォロワーのうち、東西線沿線に住んでいる人は何人？ 本を買いにきてくれる人は何人？ と考えると20人に満たないかもしれない。インターネットはコミュニティのようなイメージはあっても、町ではありません。集客や店舗の広報にSNSの活用は欠かせないとされていますが、それだけではなく、リアルに場所をもち商売をしてこそ、町とつながっている感覚が育まれていくことを感じています」

実店舗をもって商売をすることで、リアルに町とつ

ながっていく感覚をもつというのは、書店という業種に限った話ではないかもしれない。そのなかで、書店という業態であることの意義をどのように捉えているのかを柳下さんに聞いてみた。

「本が好きで、書店が好きだからという意地みたいなところもありますけど、プロダクトのなかで唯一本だけが、棚に並べることであらゆる思想を表現できるものだと思います。レコードも近いと思いますが、レコードより本のほうが圧倒的に多品種多項目です。背表紙の情報量で伝えたいテーマにあわせた雰囲気を出すとか、アイデアを体現させることが意外と簡単にできてしまうのです。また、書店にはおそらくネガティブなイメージがまったくない。町に書店ができると聞いて喜ぶ人は多いけど、嫌な気持ちになる人はいないはず。この町にずっと書店があって欲しいという、町の人たちの期待に応え続けることは、すごく大事なことだと思います」

柳下さんは、本がもつ思想を表現できる機能は、もっと他の場所に拡張できる可能性があると考えている。たとえば、カフェや美容室、雑貨店、映画館、イベントや自治体が運営するスペースなど、どんな場所でも書店の機能を加えることで、その場所にあった世界観をつくることを補助し、そこに集まる人との接点やコミュニケーションを深めるきっかけにつなげることができる。そんな思いから、小規模取次の「ことりつぎ」という、誰でも書店をつくることのできるサービスを展開していた。10年前に新規事業として書店を開業した時、取次との契約が簡単ではないと感じたことも「ことりつぎ」を始めた理由の一つだ。

「本に触れられる場所が少しでも増えたらいいなという思いと、ブックカフェなどの業態が増えていることから、既存の業態に本の販売を加えることもできると考

えて実験的に始めました。現在は、大手の取次会社が同様のサービスを展開しており、10年前と比較すると書店を始めるハードルは低くなっているの、〈ことりつぎ〉の新規の取引は停止しています」

在庫数ではなく、選書により書店の個性を出すことのできる独立系書店は「こんな本があったんだ!」という機会を与えられる強みがある。ただ、選書のスキルや属人性はとても重要ではあるものの、事業として継続させていくためには、属人性を強めすぎないことも意識していると柳下さんは言う。

「出版の取次の仕組みが、日本全国にたくさんの本を届ける役割を担ってきたのは素晴らしいことですが、そのために書店員の選書のスキルがスポイルされてしまった面はあると思います。取次の仕組みが時代にあわなくなってきた一方で、独立系書店が増えて、選書のスキルが見直されていることも喜ばしいことです。でも、属人性で成り立つことは、その人の代が終わったらなくなってしまうかもしれない。自分は会社として書店を経営していて、この場所にずっと書店があり続けて欲しいと願っています。だから属人性に偏り過ぎず、取次や書店営業の方など関係者やお客さんの声を取り入れ続け、時代にあわせた書店のあり方を模索していきたいと考えています」

書店を事業として成立させ続けていくことは簡単ではない。従来の書店の経営が厳しくなっているなか、独立系書店の未来を見据えた再現性のある事業のあり方が求められている。「町が店を育て、店が町を育てる」という言葉には、その一片が見えるように感じる。「属人性を尊重しながらも、属人性に偏り過ぎない」という事業の持続可能性をシビアに見つめる柳下さんの視点も、大きなヒントになるのではないだろうか。



BOOK STAND 若葉台

団地のなかの

新しい書店のかたち

開業：2022年

住所：神奈川県横浜市旭区若葉台3-5-1

電話：070-8532-3643

営業：10:00～18:00(火曜定休)

HP：https://booktruck.stores.jp

ジャンル：オールジャンル

形態：新刊書店(一部古書有り)/ドリンクスタンド/雑貨



「BOOK STAND 若葉台」店主の三田修平さん。
後ろのレジカウンター内にはドリンクスタンドを併設

誰も模索していない 団地の書店への好奇心

横浜市旭区の横浜若葉台団地のショッピングタウンにある「BOOK STAND 若葉台」は、団地内にある書店として2022年8月にオープンした。店主は10年以上移動式本屋「BOOK TRUCK」として、クルマに本を積んでイベントやマルシェなどで本を販売してきた三田修平さんだ。

1979年から入居が始まった横浜若葉台団地は、神



三田さんは移動式本屋「BOOK TRUCK」として、クルマに本を積んでさまざまな場所で本を販売してきた (photo提供:三田修平)

神奈川県住宅供給公社が開発した分譲住宅・賃貸住宅が複合した大規模団地。面積は約90ha、73棟の中高層の建物が並び、総戸数5300戸、現在も1万2800人以上が暮らす。東急田園都市線の青葉台駅からクルマで約20分の立地にある。団地の中心にあるショッピングタウンには、スーパーやコンビニ、飲食店、薬局、銀行など、日常生活に必要な機能が揃っている。駅からの距離は遠いが、団地内で便利に暮らせる一つの町になっている。「BOOK STAND 若葉台」が入るテナントもショッピングタウンにあり、もともとは「有隣堂」、その後「福家書店」が営業していたが、数年前に閉店してからは空き店舗となっていた。「団地内に書店がなくなって困っている」という住民からの声があり、団地に書店を取り戻そうと動いていた神奈川県住宅供給公社と団地の管理業務などを担う若葉台まちづくりセンターから、横浜若葉台団地の住民であり、移動式本屋「BOOK TRUCK」の活動をしている三田さんに声がかかった。

「僕は同じ旭区にある左近山団地が実家で、8年前から横浜若葉台団地に住んでいます。子どもの頃から団地内に書店があるのは当たり前の風景だったし、ここに住み始めた当初は、まだ「福家書店」が営業をしていました。今は左近山団地の書店も閉店しており、団地から書店がなくなっていくのは寂しいという気持ちは強かったです。でも、閉店していく理由があるのもわかる。客層はほぼ住民に限られ、人口減少、高齢化が進む団地内で書店を経営していくのは、普通に考えれば難しい。一方で、団地だからこそその書店のあり方は、まだ誰も模索していない。本当に可能性はないのだろうか。自分は団地で生まれ育って、長く暮らしているバックグラウンドもある。駅から離れた団地や住宅街のなかで成り立つ新しい書店のかたちを見つけていく

ことは、やりがいがありそうだと思います。何らかのかたちでできれば、この団地だけではなく、他の場所でも展開することもできる。そういう意味でスケールの大きなトライとして、面白いかもしれないと感じました」

そう話す三田さんは、「TSUTAYA TOKYO ROPPONGI」でのアルバイトを経て、渋谷の「SPBS(SHIBUYA PUBLISHING & BOOKSELLERS)」の立ち上げに参加して店長として4年間勤めた後、独立して「BOOK TRUCK」を始めた。「SPBS」は本と編集の総合企業で、丁寧な選書と店舗の奥にある編集部のオフィスが一体となった新しいスタイルの書店としてオープン当初から話題を集めた。今までも新しい書店のかたちを模索する環境に身を置き、自ら「BOOK TRUCK」という今までにない本の販売手法を生み出した。将来につながる団地の書店の新しいかたちを模索することへの好奇心が掻き立てられたようだ。

また、若葉台まちづくりセンターや団地にかかわっていたNPO法人などと協力し、書店跡地の3分の2を住民が使える多目的スペースにして、残りを書店として運営することで、壁面の什器やカウンター、造作の水まわりなど、空間に固着する設備の工事費に関しては、国の補助金制度が活用できることになり、開業資金の一部を補えたことも大きかったという。団地の関係者が一丸となって知恵を絞って書店を取り戻そうとしていたことにも背中を押された。書店と多目的スペースがつながっていることは、パブリックな雰囲気を出し、親しみやすく気軽に足を踏み入れやすい店になっていると感じる。

団地のコミュニティと本を接続

取材に訪れた平日の午後、横浜若葉台団地のショッピングタウンには、それなりに人通りがあり、「BOOK STAND 若葉台」の店の前に出された文庫本の棚から

店内にコーヒーやビールを飲んで一息つける場所もある



店舗は団地のショッピングタウン内にあり、隣の多目的スペースともつながっている

熱心に本を選んでいる人がいた。また、取材中にも予約注文した本を受け取りに来るお客さんがひっきりなしに来店する。店の奥にあるギャラリースペースでは、台湾で人気のスケッチ講師による解説書『シンプル・スケッチライフ』をテーマにした展示が行われ、この展示を目当てにやってきたと思われる方も数名おり、展示を鑑賞した後、『シンプル・スケッチライフ』を購入した人が2名いた。

「店の外の棚には、古書の文庫本、新刊の料理本、NHKの大河ドラマの関連本などを置いています。入口付近は雑誌、NHKのテレビ・ラジオ講座のテキストなど、常に人気が高く、探している人が多いものが中心です。単行本はジャンルごとに棚を分けています。健康や医療、脳トレなどの本がよく売れていますね。約3

平日の午後もひっきりなしにお客さんが訪れる





『シンプル・スケッチライフ』の展示を熱心に鑑賞する方も多かった

分の1は古書のスペースです。新刊の利益率の低さを補うために、古書を少しずつ増やしています。雑貨の販売に加え、ドリンクスタンドを併設してコーヒーやクラフトビールも提供しており、毎日ビールを買いにくる常連さんもいます」と三田さん。他の団地同様に横浜若葉台団地も住民の高齢化が進んでおり、お客さんのほとんどは高齢者だ。インターネットを使わない人も多く、店頭で欲しい本を注文できる書店の存在が、住民の暮らしを支えていることが、ほんの数時間の滞在でも伝わってくる。

「団地には昔ながらのコミュニティが残っていることも特徴」だと三田さんは言う。横浜若葉台団地内にあるカルチャースクールでは、音楽、手工芸、語学、美術、ダンスなど150近くの講座を開設しており、住民たちは新しいことや好きなことを学ぼうという意欲が強い。「BOOK STAND若葉台」でNHKのテレビ・ラジオ

店頭には料理本、NHKの大河ドラマの関連本などトレンドを意識した本を置いている



最近設置したという古書の文庫本の棚も人気がある



講座のテキストがよく売れていることもそれを物語っている。『シンプル・スケッチライフ』の展示が好評なもの、絵を描くことに興味がある人たちが一定数いることを教えてくれる。

「本は本好きな人だけが買うものではなく、趣味や好きなことの延長線上でたどり着く機会も多いと思います。団地のコミュニティと書店を接続し、共通の趣味をもつ人たちに本を届けることで、コミュニティが活性化することにつながったり、何か新しい動きが生まれたりしたらいいなと考えています。団地だからできることは他にもあって、人が密集して住んでいるから配達しやすいとか、サブスクで本を届けるサービスもいいとか、構想はいろいろあるのですが、余裕がなくてまだ実行できていません」

書店の概念をアップデートする必要性

団地で書店を営んでみて、日常的に訪れる人たちが望んでいるのは、一般的な町の書店であることを実感しているという三田さん。しかし、横浜若葉台団地の商圈では一般的な書店では経営が成り立たない。三田さんは、その実態を利用する人たちにも知ってもらい、書店に対する概念をアップデートしてもらえたらと願っている。かつてあった町の書店の機能を、独立系書店がそのまま引き受けることは不可能に近い。小さな書店は、人気の新刊本を希望通りに仕入れられなかったり、発売日に入荷することが難しかったりする。現在は、話題の新刊本が発売日に全国どこの書店の店頭にも並んでいるという時代ではなく、書店で本を取り寄



平台の什器は可動式。横浜国立大学建築学科の学生たちの協力のもと造作



シェア型書店「ワカバのホンダナ」も運営中

せるのにも時間がかかる。暮らしのすぐそばにあり、身近なものだった本と人の距離は遠くなっているのだ。

そんな環境のなかでも、三田さんは日々訪れる団地のお客さんと向き合い、そのニーズに合わせて本を選んで提供してきた。読んで欲しい本や自分の好きな本を提案して、団地の外から人を呼び込むことを目指した企画なども展開してきたが、駅からバスに乗って「BOOK STAND若葉台」へ足を運んでもらうことは、想像以上にハードルが高いと感じている。

仕事帰りに書店に寄る人がいることを予想し、オープン当初は20時まで営業していたが、現在は18時までの営業に切り替えている。団地の住民で仕事をしている人が書店に行きたいと思った場合、大抵は職場の近くか青葉台駅の駅ビルにある書店に立ち寄る。これも三田さんがこの場所で書店をやってみて初めてわかったことだ。

閉店時間を早めた分、月に1回、18:00~21:00の時間帯で「BOOK SNACK」というイベントを始めた。クラフトビールなどのドリンクを飲みながら、集まった人たちが本にまつわる会話を気軽に楽しむ。このイベントには団地の外から通ってくる人も多く、本好きな人たちの社交場のように感じているという。

もう一つ、力を入れているのが「BOOK STAND分店」をつくっていくことだ。2024年10月、左近山団地

にあるコワーキングスペース「トリオ左近山」の一角に、すでに第一号店がオープンしている。取り扱いが古書のみだが、新刊本の注文による取り寄せも可能だ。

「分店は単行本の本棚三つくらいの規模で500冊程度を扱っています。人件費や家賃がかからず、書店の機能が欲しい場所に必要なものだけを付け足していくことができます。時間がかかっても新刊の注文をしたいという人は多く、地域のインフラとしての役割ももてるのではないのでしょうか。運営する側も無理をしないかたちで、必要な場所に書店機能を成立させることにつながっていけばと考えています」

他の団地はもちろん、高齢者施設などにも展開できれば、喜んでくれる人は多いのではないかと考えているという。

分店として書店の機能を外へ広げていくことは、移動式本屋「BOOK TRUCK」を長年続けている三田さんだからこそ、生まれてきたフレキシブルな発想だと感じる。「今後も本がある場所や本と人との出会いを少しでも増やしていきたい」とも話す。他の人がやっていない団地の書店としての新しいかたちを試行錯誤することで生まれてくるアイデアには、今後の町の書店のあり方を再定義する可能性が秘められているのではないだろうか。



ブックス キューブリック

「福岡を本の街に」する、 町の本屋さん

[けやき通り店]

開業：2001年

住所：福岡市中央区赤坂2丁目1-12 ネオグランデ赤坂1F

電話：092-711-1180

営業：11:00～19:00 / 月曜休（祝日の場合営業）

HP：https://bookskubrick.jp

ジャンル：オールジャンル

形態：新刊書店（一部物販有り）

[箱崎店]

開業：2008年

住所：福岡市東区箱崎1丁目5-14ベルニード箱崎1F

電話：092-645-0630

営業：10:30～19:00 / 月・火曜休（祝日の場合営業）

HP：https://bookskubrick.jp

ジャンル：オールジャンル

形態：新刊書店（一部物販有り）/ カフェ / ギャラリー / ベーカリー



ブックスキューブリックの大井実さん



けやき通り。けやき並木が続く沿道に、洒落た雰囲気の店舗が連なる

以前、福岡出身の人から、大濠公園周辺は東京の代官山みたいな場所、と聞いていた。その後、実際に大濠公園を訪ねた時には、その伸びやかな広さと、隣の福岡城址・舞鶴公園ともつながる豊かな自然に、代官山というよりは、日比谷か、あるいは二重橋といった皇居とお濠のあるエリアに近いように感じたものだが、今回、大濠公園の南側から天神方向に伸びるけやき通りを散策してみると、確かに少し、旧山手通りに似ているかもしれない。だとすれば、さながらブックスキューブリックと対比するのは代官山の蔦屋書店か、などと考えるも、店舗面積も資本の規模もだいぶ違う。だが、けやき通り店と箱崎店、福岡市内に2店舗を構えるブックスキューブリックのこれまでの活動を考えると、とくに、街に魅力を創出する書店としての存在感は、勝るとも劣らない、とも思えた。

本のイベント「ブックオカ」を主催

店主の大井実さんがけやき通りに書店を開業したのは2001年。店名は映画「2001年宇宙の旅」の監督、スタンリー・キューブリックから。2001年という符号以外にも、込めた思いはいろいろあるが、「宇宙の旅」に準えるとは、書店開業に対する並々ならぬ意気込みが伝わる。そもそも大井さんにとって福岡は、出身地ではあるもの子ども時代は転校も多く、実家としての土地家屋があるような場所ではなかった。大学は京都、就職は東京で、当時、雑誌『流行通信』や『STUDIO VOICE』を発行していた流行通信社の関連会社で、ファッション関連のショーやイベントを担当。その後もキャリアを活かし、東京、イタリア、大阪で活動してきた。メディア系ではあるものの、書店とはあまり関係のないキャリアを積んでいたが、いつか自分の店をもち商売してみたいという憧れは学生時代からあり、それが「本屋」になったのは、昔から本や雑誌、そして本屋という場所が好きだった自身にとっては必然だった。



『美しい本屋さんの間取り』（建築知識編、エクスマレッジ、2022年）の表紙も飾るけやき通り店。内装は、箱崎店も共にインテリアデザイナーである大井さんの奥さまが手がけている



けやき通り店。テラス席では、購入した本を読みながら、店内や自販機で購入したBKベーカリーのパンを食べながらくつろぐ人も多いという



けやき通り店のレジ前では、BKベーカリーのパンやオリジナルグッズ、雑貨なども販売している

開業の場所が福岡になったのは「たまたま」で、別の都市でも検討したそうだが、奥さまも福岡出身ということも、この地に定めた理由ではあるようだ。なお、当初は賃貸で探していた店舗物件を、分譲で出ていた現在の場所を購入して開業することになったのも「運命的な導き」としか思えない偶然だったそうだ。

じつはこうした経緯は大井さんの著書『ローカルブックストアである—福岡ブックスキューブリック』（晶文社、2017年）に詳しい。今回、福岡を訪ねる前に読んだ同書には、大井さんが「自分の居場所」として書店開業を目指し、そこから広がっていったさまざまな活動が、けれん味のない文章で綴られている。なかでも、大井さんが2006年に地元の有志と共にスタートしたブックイベント「ブックオカ」は、書店とまちづくりを考えるうえでのリーディングプロジェクトといえる。「福岡を本の街に」をキャッチフレーズとしたこのイベントは、例年10～11月の1カ月間、福岡市内の書店を中心に、作家や有識者のトークイベント、アートや写真の展示を行うほか、けやき通りに店を構える店舗の軒先を借り、ネットで募集した一般参加の人々が持ち寄った古本をフリーマーケットのように販売する「けやき通り

のきさき古本市」、各書店の書店員がお薦めする文庫本に、統一の帯をつけて販売する「激オシ文庫フェア」などが開催される、というもの。とくに、11月3日の文化の日で開催される「のきさき古本市」は、回を重ねるごとに規模が拡大し、およそ1kmのけやき通りに約100組の1日書店が出店し、延べ6000人ほどの人出で賑わう一大イベントになっている。その光景は、まさに「福岡を本の街に」というキャッチフレーズを体現しているようだ。

「ブックオカ」に合わせて開催される「けやき通りのきさき古本市」の様子（photo提供：ブックスキューブリック）





箱崎店。書店にカフェ、ギャラリー、ベーカリーを併設する複合型店舗で、頻繁に行われるトークイベントの会場にもなる

1階の書店スペース



「店主おすすめ本」コーナー。大井さんは西日本新聞の連載「カリスマ書店員の激推し本」にブックレビューを寄稿しており、そこで紹介した本などが集められている



2階のカフェ「CAFE KUBRICK」。大井さんはコーヒーにもこだわり、すっきりしたなかにもコクがあるオリジナルブレンドを提供している

2階のカフェへと続く螺旋階段。周辺には絵本などの児童書が集められている

取材時、ギャラリーでは益田ミリのコミックエッセイ『今日の人生3 いつもの場所』（ミシマ社、2024年）刊行記念の原画展が開催されていた



「パール」のような サードプレイスの存在に

「もともとイベントプランナーのような仕事をしていたので、こういうことを企画するのは比較的得意なんですよね」と大井さん。ただ「初めからまちづくりをしようとは考えていなくて、福岡の街と自分の拠点をつなぐ、自分の居場所づくりをしたいと思って始めたこと。ですがやっているうちになんとなく、本屋というのはまちづくりの拠点になり得る、都会生活を送る人々にとって必要な、居心地のよいサードプレイスとしての可能性をもっていると思うようになりました」と語る。

大井さんがイメージしたのはイタリアのパールだ。1990年代「イタリアで暮らしてみたい」と渡欧したイタリアの街で、エスプレッソを飲むくらいほんの短い時間をパールで過ごし、店主や常連客と交流する「ベタベタしすぎずにコミュニケーションが取れる場所」の心地よさを体験した。書店は飲食の場ではないが、誰にも開かれていて、好きなようにひと時を過ごすことができる。またブックオカを開催してみても、街にとっても、地域の人々にとっても「本を媒介として人とつながれる

場が求められている」とも実感した。だが、けやき通り店の、約15坪という広さの書店ではイベント開催は難しい。書棚スペース以外にも、ひと時を過ごせるカフェや、トークイベントが開催できる場が欲しいと考え始めた時、JR箱崎駅から徒歩1分、駅舎移転に伴い再開されたビルで書店開業の機会を得た。

「2006年のブックオカの時、都築響一さんを招いてトークイベントをやったんです。それがスライドを使った漫談トークで来場者に大ウケした。これは、独立したイベントとして人を呼べるな、と確信しました。当時はまだ、書店主催でトークイベントをやっているところはなかったと思います。それで、昼間はカフェ、夜はイベントができるような場をつくりたいと思って、2008年に箱崎店をオープンしたんです」

床面積20坪ほどの箱崎店は、1階に書店、螺旋階段でつながる2階にカフェとギャラリーを併設。2016年からは、2階の、もともと料理教室だった隣のフロアが空室になってしまったことから、壁を抜いてこれをつなげ、カフェに併設するかたちで「BKベーカリー ほん屋のぱん屋」として本格的なパン工房も開業している。

箱崎店で開催されるトークイベントは、大井さんが著書を読んで感銘を受けた作家やアーティスト、有識

者を招いて、月2〜3回のペースで開催されている。話の内容は登壇者ごとに異なるが、常に根源にあるテーマは「人生、どう生きるか」。大井さん自身が書店を開業したのも、自分がどう生きたいのかを追求し、その道標として多くの本に触れてきた結果だからだ。

「トークイベントを始めた最初の頃、『自分の仕事をつくる』などの著者で、働き方探究家の西村佳哲さんのトークイベントを開催した時には満席に。みなさん“熱く”集まってくれた。そういう熱気とダイレクトにつながるができるのがトークイベントの醍醐味ですが、やはり働き方や生き方というテーマへの関心は高いですね。そもそも本との出会いも、そういったことへの関心から発生することが多いのではないのでしょうか」

ちなみに、トークイベントの参加者は「男はつるんでしか行動できないから(笑)」なのか、女性が多い。ただ大阪からわざわざ足を運ぶ若い男性もいるという。どうやら登壇者が誰でも訪れる「ブックスキューブリックで開催されるトークイベント」のファンも少なくないようだ。

街の小さな総合書店として

そして当然、ブックスキューブリックで扱う書籍も、トークイベント同様「どう生きるか」の指針になり得る文芸書や人文書、多様な視点や創造性をもたらすアートやカルチャー系の書籍が多い。しかし、大井さんがもっとも重視しているのは「小さな総合書店」であることだ。実際に書店を訪ねると、話題の新刊から文庫本や新書、雑誌の他、絵本などの児童書もバランスよく揃っている。ただ、そうした書棚をじっくりみていくと、他の書店ではあまり出会ったことのない出版社の書籍

が埋もれていることに気づく。ブックスキューブリックの書棚は、開業から現在まで、すべて大井さんが選書した書籍だけで構成されているのだ。今でこそ「セレクト書店」が各地に増えているが、2001年当時、かなり挑戦的な試みだったはずだ。

大井さんは開業に先立ち、書店経験を積むために大型書店でのアルバイトを経験した。この時、取次から送られてくる「委託配本」の量と、これに伴う返品量の多さに疑問を感じた。また、どの書店に行ってもほとんど同じ品揃えであることにも違和感があった。おりしも、1990年代末には天神エリアに大型書店が林立し、「天神書店戦争」などと呼ばれていた。大型書店間での競争が激化するなか、同じ出版流通の仕組みに乗ってしまっただけでは、小さな書店が生き残っていくことはできない。そこで、店舗の小ささを逆手に取り、ある程度ターゲットを絞ることで、必要な人が必要な本に出会いやすい本屋であることを目指した。そしてこうした方向性が間違っていなかったことは、訪れるお客さんの「お金がない時に来ると危険な本屋だ」という声や、何より、開業から四半世紀が経とうとする現在まで、同じようなスタイルで営業を続けていることが証している。

趣味や実用、向上心や向学心、人生への悩みや迷いに応じてくれるような本を探して、あるいは、単なる時間潰しでも、誰もがアクセスできる書店というリアルな場。そこは、誰にとっても「自分の居場所」と感じられる親密な場になり得る。まちづくりにおいて、地域に根ざした個人店の重要性が見直されているが、そのなかでも、本屋は街に必要なだと、ブックスキューブリックと、これを拠点とした大井さんの活動から、確信を得た思いだ。

なぜかい町、好きな町

第3回

真壁町

茨城県桜川市真壁町。2005年に合併し桜川市となるも、その歴史は古く、戦国時代、真壁氏が本拠となる真壁城を築いたことに始まる。木下さんは2011年に竣工した「真壁伝承館」の設計に携わって以来、真壁町のファンに。当時もお世話になったという桜川市の飛毛俊浩さんにもアテンドいただき、真壁町の魅力を紹介してもらった。

イラスト:広瀬摩紀



案内人

木下庸子さん

きのした・ようこ
工学院大学名誉教授、建築家、設計組織ADH代表。
ハーバード大学大学院デザイン学部建築修士課程修了。
作品に「アパートメント東雲キャナルコート」「真壁伝承館」「URまちとくらしのミュージアム」他。著書に『いえ団地 まち——公団住宅 設計計画史』（植田実と共著、住まいの図書出版局、2014）他。

真壁町では毎年2月4日～3月3日まで「真壁のひなまつり」を開催しています。町なかの商家や民家の軒先に雛人形が飾られ、通常なら入れないような蔵の中にも展示があるので、町歩きをしながら真壁町の歴史や、文化的な豊かさを知るには最適です。私も久しぶりだから、とても楽しみ。

真壁町とのお付き合いは、設計組織ADHとして「真壁伝承館」（竣工2011年）を設計したことがきっかけです。真壁は、市街地約17万6000㎡が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている歴史的な風情が感じられる町。真壁の人たちは「開発から取り残された町」なんて言いますが、戦国時代からの歴史が、日常の中に残されているのはとても貴重なことです。なんといっても、400年以上前の町割りや古い建物が良好な状態で残されているので古地図を見ながら町歩きができるほど。伝承館のプロポーザルコンペに参加するにあたり、初めて調査に訪れた時には感動しました。ヒューマンスケールなウォークアブルシティで、まるで歩行者優先のヴェネツィアみたいな町だと思ったくらいです。

伝承館を設計するにあたり、私たちが取り入れた手法は「サンプリングとアセンブリ」。町に残る歴史的な建物を調査・採寸（サンプリング）してボリュームやプロポーションを把握。ただし、昔と同じ木造建築ではなく、現代的な機能・性能をもちながらも新しい建物として再構築（アセンブリ）しています。じつは伝承館については以前本誌（no.117「建築とまちづくり」2016年）で紹介していますので、解説はそちらに譲り、とにかく町に出ましようか。

今日は祭日ということもあって、さすがに賑わっていますね。町のメインストリートは御陣屋前通り。高上町通りとの角にある洋風な建物は旧真壁郵便局です。1927（昭和2）年の建物で当初は銀行でしたが、戦後、郵便局に。今は観光案内および地域のコミュニティ施設として再生活用されています。この建物も登録文化財に指定されていますが、じつは真壁町の中には100棟以上の登録文化財があるんです。

御陣屋前通り沿いだけでも、川島書店や木村家、潮田家など、見渡す限り文化財だらけ。「見世蔵」と呼ばれる江戸末期以降に発達した立派な商家建築が多く、



いかにこの町が豊かだったかがわかります。飾られている雛人形もとても豪華ですね。以前、木村家のおばあさまに「うちの雛人形は東京の名のある店から取り寄せたもので、大勢の使用人が担いできた」というお話をうかがったことを覚えています。

今日のお昼ごはんは伊勢屋旅館の「雛まつりランチ」を。こちらにも立派な雛人形が飾られています。今年のひなまつりのポスターが伊勢屋さんをモデルにした切り絵ですね！こちらには現場に通っていた時に宿泊したこともあるんですよ。

伊勢屋さんのお向かいには蔵元の村井醸造。真壁町にはもう一つ蔵元があって、中心からは少し離れています

が後で行ってみましょう。真壁町はもともと城下町だから、和菓子店が多い印象でしたが、私たちは辛党なでもっばらこっちの方が気になっちゃって。伝承館のお向かいにある酒屋さん、増田酒店のご主人ともすっかり仲良くなって、何かとお世話になりました。

では腹ごなしにもう少しあちこちの雛人形を見せてもらいながら南下して行きましょう。山口川を渡った先が清酒「花の井」を醸す蔵元、西岡本店です。なんだかカフェ風のおしゃれな看板が出ていますよ。「甘酒ラテ」ですって。辛党とはいえ、歩き回って少し疲れた体には甘いものがあると嬉しい（笑）。私は「抹茶甘酒ラテ」、お願いします！

都市の緑
3 表彰



緑 が つ な ぐ

町 ・ 人 ・ 暮 ら し

一般財団法人第一生命財団では、公益財団法人都市緑化機構と共に、「緑の環境プラン大賞」(共催)、「緑の都市賞」「緑化技術コンクール」(いずれも特別協賛)の、「都市の緑3表彰」に取り組んでいる。これらは、都市緑化を通じ、環境保全、ヒートアイランドの抑止、二酸化炭素の削減、緑のまちづくりや植栽活動を通じたコミュニティの形成などに貢献する事業を支援、顕彰するもので、全国各地で、すでに多くの取り組みが実績をあげている。これらに選出された事業のなかから、とくに都市環境の向上やまちづくりに資する事例を取材し、緑を通じたまちづくりを紹介していく。

取材・文:斎藤夕子 photo:坂本政十賜

[第23回]

緑化技術コンクール
環境大臣賞:緑化施設部門

那覇市本庁舎

1965年に竣工した旧庁舎の老朽化に伴い、2012年に新設された「那覇市本庁舎」。「“みどりあふれる庁舎”をみんなで作る」をテーマに、地上12階、地下2階、塔屋1階建ての建物が全面緑化された。竣工から12年

を経た2024年、建物の壁面、屋上、テラスや中庭に植栽された草木が成長し、市の景観計画において「亜熱帯庭園都市」を掲げる那覇市に相応しい景観を形成するようになったことから「緑化技術コンクール」に応募、



2012年に竣工した「那覇市本庁舎」



本庁舎入り口に聳えるガジュマル。旧庁舎時代から市民に愛されてきたシンボリック的存在



旧庁舎から引き継がれたヒカンザクラ。庁舎東側の歩道沿いに移植されている

見事、環境大臣賞を受賞した。

本庁舎の意匠・構造設計を行ったのは、沖縄県内の公共建築や大型商業施設、ホテルやホールなど、多くの実績をもつ株式会社国建、設備設計は株式会社環境設計国建が担った。大型台風が頻発する沖縄県において、とくにその影響を受けやすい建物の緑化に関しては風土を知り尽くした知識と経験が求められる。本庁舎においても、そうした知見が遺憾なく発揮されたかたちだ。

強風から緑を守る 「ワイヤーメッシュカゴ」を開発

国建代表取締役社長の石嶺一さんと建築設計部の高江洲尚さんに案内されて向かったのは、本庁舎対面にある複合型施設「パレットくもじ」。1991年に沖縄県初の市街地再生事業により竣工した同施設を手がけたのも国建(株式会社アール・アイ・エーとのJV)で、この屋外階段から本庁舎の全体像がよく見えるのだ。

本庁舎を俯瞰して、何よりも特徴的に感じるのはその軽やかさだ。建築面積4962㎡、高さ54.4mのRC造、地上から中層階までが階段状にセットバックしながら12階まで伸びるボリュームをもちながらも、外壁全体が縦横の白いルーバーで構成されていることで、まるで巨大なカゴのような透け感がある。そして、ルーバーの隙間からは鮮やかなグリーンが溢れ出し、直線で構成されたソリッドな外観に、有機的で穏やかな、親しみが感じられる表情をつくり出している。

「台風の常襲地域である沖縄県では、強風対策が何より重要です。とくに風台風で潮を被ってしまうと、植物が枯れて茶色くなってしまいます」と高江洲さん。本庁舎でも竣工2年目に風台風の影響を受けたという。「ただ、本庁舎では壁面緑化の植栽周りにくワイヤーメッシュカゴ」を用いたことで、強風により植物が飛散するリスクを低減しています」と教えてくれる。

では、ともかく実物を拝見しようと地上に降り、本庁舎を訪ねる。エントランスに聳える2本のガジュマルは旧庁舎時代から樹齢を重ねる大木で、沖縄らしさが強く印象づけられる。2月半ば、濃いピンク色の花を咲かせているヒカンザクラも旧庁舎から移植したものだ。この他、新庁舎として新たに植栽した植物は、高木(カエンボク、シマトネリコ、ジャボチカバなど)25本、中木(ハイビスカス、ヤコウボク、ヘリコニアなど)329本、低木(サンダンカ、スギノハカズラ、ジンジャー類など)1万2129本、地覆類(ヤブラン、イワダレソウなど)2万3308本におよぶ。建物の屋上や壁面の他にも、敷地内には多くの植栽が設けられ、涼しげな木陰を形成している。

壁面緑化におけるポイントとなる「ワイヤーメッシュカゴ」は、板状のワイヤーメッシュを折り曲げて立体的にしたもので、ルーバー内のバルコニーに植栽されたブーゲンビレアやアリアケカズラなど、登攀しながら縦横に伸びるつる性植物を囲うように配されていた。



強風から、植物の幹と枝を守るために開発された「ワイヤーメッシュカゴ」。外観を特徴づけるルーバーと、ワイヤーメッシュよりも内側のバルコニーに植栽を設けたことでメンテナンスを容易にしている



ワイヤーメッシュに守られた植栽が、建物から溢れるように枝葉を伸ばす。ピンクの花は市花でもあるブーゲンビレア

強風による枝葉の飛散を抑制すると共に、たとえ葉が飛ばされても、幹や枝が守られることで、緑の早期回復にも効果があるという。

階段上に張り出したテラスや屋上緑化においても、強風の影響を考慮し、とくに高層階部分ではハマニンドウなど、風や潮に強い海浜性の植物を選定して植栽している。なお、竣工から12年の間には、とくに草本類で自然に遷移したものもあるが、緑の量感は安定し、あまり手をかけなくても順調に生育しているようだ。

また、本庁舎の佇まいをさらに特徴づけているのは5階以上の高層階中央部に設けられた緑の吹き抜け空間だ。吹き抜けの周りに、各階に植えられたポトスがカーテンのように垂れ下がり、まるでリゾートホテルのようなゴージャスさがある。5階エレベーターホールから吹き抜けに面しては、スパティフィラムや葉付きの多いジンジャー系の植物が植えられた花壇も設けられ、同階にある市長室などを訪れる来訪者を圧倒的な緑が迎え

てくれる。

じつは、同様の緑のカーテンは、1975年に沖縄国際海洋博覧会にあわせて開業した「ホテルムーンビーチ（現ザ・ムーンビーチ ミュージアムリゾート）」にも取り入れられたスタイルで、国建の名誉会長でもあった沖縄県を代表する建築家・国場幸房氏（1939-2016）の設計によるものだ。「本庁舎の意匠設計も国場さんが手がけたもので、一貫して沖縄らしさを追求する設計思想がありました」と教えてくれるのは石嶺さん。この吹き抜けは、まさに沖縄県の歴史と未来が繋がれた空間ともいえそうだ。

「みどり」を「みんな」で「みらい」につなげる

建て替えられる前の旧庁舎時代にも敷地内には多くの緑が育ち、市花のブーゲンビレアやアマミツタなど

が建物を覆うなど、良好な緑化環境がつけられていた。それだけに、新庁舎建設にあたっては緑を残してほしいという市民の声が多かった。このことから、市では「緑の里親」制度を創設。既存のブーゲンビレアを123鉢に分け、市内の小学校や企業、市民らに「預かりボランティア」を担ってもらい、新庁舎完成後に移植している。アマミツタも、元木を市内の公園に移植した他、挿し木苗1200本をつくり、市民や公共施設に配布、一部は新庁舎に移植した。「緑の里親」制度は、新庁舎のテーマでもある「みどりあふれる庁舎」をみんなでつくる」の実践でもある。その他、敷地内にあったゲッケイジュやフクギ、ハウオウボクなども小学校や公園などに移植され、新たな土地に根付いているようだ。

「緑の里親制度で預かってもらったブーゲンビレアの多くは、市民の皆さんの憩いの場としても利用してもらいやすい2階テラスの周囲に植栽しました」と教えてくれるのは、那覇市まちなみ共創部副部長の新里武督さんだ。また6階テラスには、庁舎入り口にあるガジュマルからの挿し木で育てた苗も植えられている。新旧通じて、那覇市本庁舎のシンボルとして聳え立つガジュマルだが、その樹齢は少なくとも、すでに60年を超えている。ガジュマルの樹齢は100年とも150年ともいわれるが、それを超えても、長年市民に愛されてきたガジュマルの遺伝子を残し、未来につなげていこうという試みだ。

那覇市本庁舎の設計においては、「みどり」があふれる庁舎」「みんな」とつくる庁舎」「みらい」につなげる庁舎」という三つのテーマもコンセプトとして掲げられていた。緑を通じて、これらの基本理念を余すことなく実践してきた本庁舎は、竣工から12年経った現在、すでに那覇市を象徴する建物として、その存在感を示している。



ポトスなどのつる性植物が垂れ下がり、緑のカーテンをつくる吹き抜け



5階エレベーターホールから望む吹き抜け空間。風の影響が少ない花壇では、スパティフィラムが大きな葉と花をつけ、旺盛に育っていた

【取材協力】

[那覇市]

副市長・金城康也さん

総務部 部長・島袋久枝さん/副部長・大城敦子さん/

管財課 課長・大城修さん/管財課 主幹・大城亮平さん/管財課 主事・安里恭也さん

まちなみ共創部 副部長・新里武督さん

[株式会社国建]

代表取締役社長・石嶺一さん/

建築設計部 建築II部 部付部長 一級建築士・高江洲尚さん



建物が階段状にセットバックした「屋上緑化」部分には、刈り込みの手間がかからないイワダレソウなどの地被類や、強風に強い海浜性植物が植えられている



庁舎西側。新設工事に合わせて歩道を拡幅し、カエンボクとハイビスカスによる並木道を構成。日差しを遮る木陰をつくる



6階テラスに植栽されたガジュマルの幼木(中央)。花壇を囲んでベンチが設けられ、市民の憩いの場ともなっている



テラスでは、職員がプランターで花や野菜を育てる様子も。庁舎にかかわる職員らが緑化エリアに関心をもち、親しみをもって活用している

back number

『City&Life』は1984年2月に創刊、「都市のしくみと暮らし」を基本テーマに毎号特集を組み、国内外の事例紹介などを行っています。

年3回(4月・8月・12月)発行、頒価500円+送料実費でご購読いただけます。

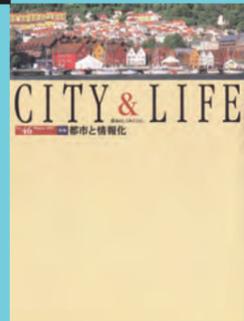
毎号内容(PDF)をホームページに掲載いたしますので、そちらをご覧ください。ご希望の号をお求め願います。(定期購読は諸般の事情により受付を終了しました)

City&Life バックナンバー

<http://group.dai-ichi-life.co.jp/d-housing/citylife.html>

今号と関連する特集号をPick Up

No. 46
【特集】都市と情報化



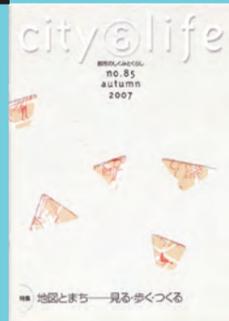
(1997.12)

No. 74
【特集】都市の言説を巡る旅
—10のキーワードから探る
都市【論】の現在



(2004.12)

No. 85
【特集】地図とまち
—見る・歩く・つくる



(2007.9)

No. 113
【特集】新しい図書館



(2015.3)

No. 127
【特集】カフェとまちづくり
—心地よい空間と街並み



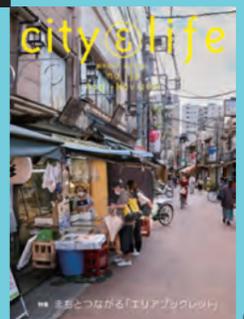
(2019.12)

No. 129
【特集】都市の言説を巡る旅
—8のキーワードから探る
都市【論】の現在2020



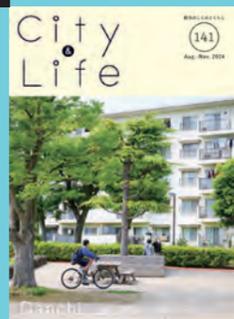
(2020.8)

No. 132
【特集】まちとつながる
「エアブックレット」



(2021.8)

No. 141
【特集】Danchi
……再生・革新への
多彩なアプローチ



(2024.8)

No. 142
【特集】公共交通の未来



(2024.12)

近刊

第一生命財団について

第一生命財団は、第一生命保険相互会社(現第一生命保険株式会社)からの拠出金をもとに設立された都市のしくみと暮らし研究所、地域社会研究所および姿勢研究所が、2013年4月1日付で合併し発足した一般財団法人です。

当財団は、豊かな次世代社会の創造に寄与することを目的として、少子高齢化社会において、健康で住みやすい社会の実現に向けた調査研究ならびに提案、助成等を行っています。具体的には、これまで取り組んできた「都市と暮らし」「コミュニティ」「姿勢と健康」に関する調査研究と啓発活動に加え、「子どもの未来を応援する」事業として、新設後3年以内の保育所(認定子ども園を含む)に対する助成事業および緑豊かな住環境の整備のための都市緑化に関わる助成事業「都市の緑3表彰」に取り組んでいます。

お知らせ

2024年度実施の第34回研究助成には68件(一般研究49件、奨励研究19件)の応募があり、10件(一般研究6件、奨励研究4件)の助成対象を決定いたしました。詳しくは下記ホームページをご覧ください。

【ホームページ】

<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dai-ichi-life-foundation/>

【お詫び】

本誌142号、30ページに誤りがありました。正しくは以下の通りです。お詫びして訂正いたします。
×福島県糸島市 ○福岡県糸島市

City & Life 143 Apr. 2025

2025年4月発行

企画委員

陣内秀信(法政大学名誉教授)
大村謙二郎(筑波大学名誉教授)
小泉秀樹(東京大学教授)
木下庸子(工学院大学名誉教授・設計組織ADH代表)
野澤千絵(明治大学教授)
北奥郁代(第一生命財団常務理事)
佐藤真(株式会社アルシーヴ社)

編集・発行

一般財団法人 第一生命財団
東京都千代田区平河町1-2-10平河町第一生命ビル2階
電話03-3239-2312

編集協力

株式会社 アルシーヴ社
斎藤夕子
村田保子

デザイン・レイアウト

河合千明

印刷

株式会社 エイチケイグラフィックス

